

ため、航空機による観測も望まれている。

(8) 南西モンスーン内に発生発達する積雲の観測的研究

単一積雲から積乱雲への発達過程等、熱帯における積雲発達の特徴を観測する。グアム島海域の島でのレーダー観測、航空機観測等が計画されている。

(9) 亜熱帯反流

貿易風と偏西風との境界に見られる亜熱帯反流の時間

的変動の実態や機構が、大気とどのような相互作用をしているのかを解析したい。

以上が小委員会としての研究計画の概要だが、観測参加など、予算を伴う問題が多いので、この面でもさらに計画を具体化するため作業を進めている段階で、最終的な結論はまだ先になろう。

(文責：朝倉正 田中康夫)

==== 海外だより ====

外国の気象観測所めぐり (7)

シャンボチュ航空測候所 (ネパール)

—27° 50' N, 86° 40' E—

標高1,300mの盆地にあるネパールの首都カトマンズは冬の間は強い接地気温逆転が起り、早朝は連日のように濃霧が発生する。1974年の暮、わたくしたちは漸くこの濃霧が薄らぐのを待って、スイス製のピラタスという7人乗りの飛行機でチベット国境の白銀の峰をめざして飛びたった。北東へ向って飛ぶこと数十分で機は深い谷間に吸いこまれて行った。エベレスト付近から南に流れるイムジャ川の谷である。気が付いて左下方をみるとすり鉢型にならんだ小さな家が見える。「これが有名なシエルバの故郷ナムチエ・パザールだ」と思う間もなく飛行機は大きく左に旋回してこの村の少し上にある台地の300mほどの草原に着陸した。5cmぐらいの積雪におおわれた草原に飛行機の車輪の跡がくっきりと残った。ここの標高は3,850m富士山頂と大体同じである。東方真近に7,000mに近いカンテガ山が輝いている。7人の乗客に対して数十人の人達が群がっている。飛行場の片隅に小さな小屋があって荷物の計量ぐらいはできるが、発着時刻の掲示があるわけでもなくのんびりしたものだ。帰って行く飛行機が飛行場の端の崖から飛び立っ

て行く姿は丁度航空母艦のようである。モンスーン季はほとんど欠航で、秋から冬の観光シーズンには大体1日1便、客がたまってくると2機つれだって行くこともある。アナウンスもなく、朝早く飛行場へ行って草原に坐って待ち、昼頃まで待ってもこなければその日は欠航ということになる。

さて、この飛行場にも航空測候所がある。世界最小の測候所。勤務者はたった1人で、この2年間交替なしというから驚く、観測は朝5時40分(グリニッチの0時)から17時40分まで3時間おきに5回で、風向・風速・気温・露点・全雲量・下層雲量・上中下層雲の雲形・雲底高度・視程・過去視在天気・降水量が無線でカトマンズの気象台に報告される。4,000mの地面近くの雲は下層雲か中層雲か興味のあるところである。それにしても-20°Cにも達する高山で1人勤務というのはきびしい。しかし、ご本人はそれほど苦しそうにも見えず、村人たちと話しこんでは3時間に1度観測に戻る生活を楽しんでるようにも見えた。(中島暢太郎)